

富士山麓の水草の生育地：特に人為的影響について

下田路子（常葉大学社会環境学部）

日本最高峰（3776 m）の富士山では雨や雪解け水はすぐに地下に浸み込むため、斜面や山頂に水草が生育できるような水域はみられない。しかし山麓には湧水地や湖沼などの多様な水草の生育地が分布している。これらの生育地は、過去から現在に至るまで様々な人為的影響を受けてきた。

山麓の湧水は透明度が高く、水温は年間を通して12～16°Cである。湧水地に特徴的な水草はバイカモ、ミズハコベ、ナガエミクリ（沈水状態）などである。北麓には堰止湖の富士五湖があり、クロモ、セキシウモなどの多様な沈水植物が生育している。平均水深が10 m以下の山中湖と河口湖では、特に水草相が豊かである。湖と湧水地との共通種はコカナダモ、ホザキノフサモ、エビモであった。湧水地や湖は周辺地域の農地開発、観光化、水質汚濁、護岸工事などの影響を受けてきた。富士五湖の水草に関する研究では、在来種の消失や外来種のコカナダモの増加が報告されている。

西麓には狸沼とよばれる湿地があったが、現在は人工の田貫湖の湖底に沈んでいる。また南麓には、浮島沼とよばれる広大な湿地があった。江戸時代の北斎と広重が、富士山を背にした浮島沼を浮世絵として記録している。浮島沼では江戸時代に新田開発が始まった。浮島の水田は泥深く、農民は水害に悩まされ続けたため、防潮堤と放水路の建設や干拓が進められた。その結果、1960年代に浮島沼は完全に消失し、圃場整備田が広がる水田地帯にかわった。現在では宅地・商業地・工場用地となる水田も多く、浮島の土地利用の変化は続いている。「静岡県植物誌」には産地が「浮島沼」や「浮島原」と記載のある約50種の水草が掲載されているが、その半数は現在の浮島ではみられない。消滅した水草には絶滅危惧種に指定されている14種が含まれている。一方では、「静岡県植物誌」に記載のない外来種が貯水池や水路に生育している。浮島沼は富士山麓で最も大きな人為的影響を受けた湿地である。

湿地の消失、水質汚濁、外来種の繁茂などは、湿地と植物に望ましくない影響を及ぼしているが、植生管理や清掃などの保全活動や植物調査も各地で実施されている。このように、富士山麓の水草の生育地は現在でも様々な人の影響を受け続けている。

引用文献：杉本順一．1984．静岡県植物誌．第一法規出版．